《論文》

神の國は斯くのごとき者の國なり
―公立小学校教員としての歩み（その 2）―

佐々木　正

1. ２回目の教員採用試験

高学年担任の日々を学年の先生方の支えで乗り越えながら、何とか２年目の春を迎えました。一般の学校で教師としての職務をひととおり体験し、改めてへき地の教師として踏み出す決心を固めました。このことは学生時代に教会学校教師や家庭教師をして教育の大切さに目覚めたころ、ある分校教師の日常生活に密着したルポルタージュに衝撃を受けてからずっと考えていました。山間の分校での子ども一人教師一人の学校教育の営みの映像は、キリスト教信仰の具現化された姿として私の心に深く焼き付きました。また、卒業論文の指導の際に浜田陽太郎先生に紹介していただいた「村を育てる学力」の著者東井義雄先生の教育実践と出合えたことにより、へき地校の教師への思いがいっそう強くなりました。東井先生の生活綴り方による主体的に生きるための学習、自分を愛し、育った地を愛するところから生まれる学習、そして、子どもと教師とのいのちのふれあい、これこそ初等教育に最もふさわしいものであると考えたからです。それは一人ひとりを徹底的に大事にする聖書の教えとともに私の教育観の土台となり、キリスト者としてへき地教育に携わりたいという思いにつながりました。

へき地、小規模校の教師として仕事をするために教員採用試験を再度受験することにしました。受験は東井先生がいらっしゃる兵庫県と千葉県に決めました。千葉県は、東京都の隣ではありますがへき地指定の小規模学校が多く、分校なども多いことを知ったからです。最初は千葉県の採用試験です。面接ではへき地教育志望を力説しました。兵庫県の受験の日は体

調が悪く結局受験を辞退しました。道は一つ、千葉県の採用だけが希望を叶える道となってしまいました。東京都には退職の希望を提出済みですので、後へは戻れません。これが本当に私に与えられた道であるのか、神さまは私の選んだ道を喜んでくださっているのかと祈り、問いながら待ちました。

千葉県の採用試験に合格し採用内定校が「千葉市立S小学校T分校」と聞かされた時の喜びは、今でも忘れられません。思い描き、抱き続けてきた夢が現実になろうとしていることに感謝の気持ちでいっぱいでした。

2. 千葉県の分校へ

(1) 分校との出合い

赴任予定校の校長先生から連絡をいただき、地図を頼りにオートバイを走らせました。まだ初春の風がひんやりする日でした。千葉市の中心部を抜けると、住宅もまばらで林と田畑が続く田園地帯です。本校に隣接して郵便局、バス停、農家が並んでいて、道を隔てた正面には商店が一軒ありました。小学校の校庭の周りは田んぼや畑です。校長先生にへき地教育志望のいきさつを話した後、T分校の概要を説明していただきました。1年生から4年生まで児童数約50名、教員は各学年担任が一人ずつで4名、中の一人が分校主任を担っていることなどを教えていただきました。そして、S小学校にあるもう一つのS分校についても伺いました。話が終わると早速校長先生の車の後について分校に向かいました。本校からは10分もかからずに着きました。

玄関にかけられた大きな表札に立派な筆跡で書かれた分校名を初めて目にした時の感動は今でも鮮明に覚えています。木造平屋建ての思い描いていた通りの校舎でした。真ん中に職員室があり、その両脇に各学年の教室が二つずつ、教室の窓は廊下側も校庭側もガラス窓がはめられ、教室の中の様子がよく見えました。土の校庭には鉄棒、ジャングルジム、ブランコ、砂場、すべり台があり、今にも子どもたちの歓声が聞こえてくるようでし

た。玄関の前には田んぼが広がり、バスが通る県道まで見通せます。ここが、神さまが私のために用意していてくださった場所、いよいよここから新しい教員生活が始まるのかと胸が高鳴りました。

ゆっくりと校舎内や校庭、施設、遊具などを見て回ってから、住まい探しに出かけました。私としては、へき地校に付属しているような教員宿舎があれば、と考えていました。T分校にもすぐ隣の敷地に独身教員用宿舎はあったのですが、つい数年前建物の老朽化で住めなくなっていました。住まいは校長先生の知り合いの不動産屋の紹介で市街地に借りることにしました。路線バスでの通勤も可能なのですが、朝の7時台に1本、乗り遅れたら9時台まで待つことになるのでオートバイ通勤をすることにしました。

(2) 分校教師との出会い

1977年4月千葉県千葉市立S小学校T分校教諭として辞令をいただき、着任しました。まだ学校は春休みでした。本校の職員室で紹介を受け、担任はT分校の3年生と発表されました。職員会議は二つの分校教師も本校に集まって行われます。その後、分校教師4人でT分校に向かい、小さな職員室で改めて自己紹介をして分校での初日が始まりました。年間の行事予定や4月の行事についていろいろと聞いた後は、ざっくばらんに様々な話題で話が弾みました。校庭に出て、それぞれの遊具施設、体育用具小屋、隣接する分校の畑、今は使われていない教員宿舎などの施設の説明を受けているうちに4人ともすっかり打ち解けました。自然豊かな環境がそうさせるのか、集まった先生方が似通っていたのか、皆さん穏やかでゆったりとした印象で、これからこの3人の先生方と一緒に仕事ができることをとてもうれしく思いました。

T分校は4人の担任だけの学校です。教員の中から分校主任が選ばれ、まとめ役となり運営されていきます。分校主任はベテランの男性教員、千葉市に長く勤め体育指導にかけては中心的役割を担っているF先生です。常にすべての子どもが楽しめる体育授業を目指し、子どもの想像力を引き

出す授業展開は工夫に満ちていました。得手不得手にかかわらずどんな子も楽しみながら技能を高め、運動量を確保する授業は私もぜひ取り入れたいと思いました。もう一人のベテラン女性教員T先生は分校の近くにお住まいで、地域の様子を隅々までご存知でした。この先生が子どもに対して声を荒げて指導する場面を私は一度も見たことはありません。子どもに対しては常に慈愛のまなざしを注ぎ、私にとって模範としたい教師の姿でした。若手女性教員S先生は新任として市内の小学校に勤めた後、分校に赴任してきた方でした。子どもへの話し方が上手で、他の先生と同様に大きな声で言うことを聞かせるような指導はしない方でした。

教科の指導分担は専科教員がいない場合、全教科を担任がすべて行う場合もありますし、体育の授業と音楽、習字などの授業と交換する場合があります。分校では原則担任が全教科指導すると聞きわくわくしました。へき地教育においては、全ての教科を担当してこそ小学校教員としての役割が担えるのではないか、という強い思いがありました。分校の小さな子どもたちにとって学校にいる間、全ての時間を共に過ごすところから教育の営みが紡ぎ出されるのではないかと考えていたからです。

(3) 子どもたちとの出会い

いよいよS小学校T分校3年、13名の子どもたちとの学校生活が始まりました。始業式には本校から校長先生がいらして話をされ、私の紹介をしてくださいました。どの子もみんな自然にあふれ出る笑顔をしていました。前任の先生との思い出を抱きながら、24才の私がどんな人か探る気持ちもあったでしょう。どんなことをしたら怒られるのか、どんなことだったら怒られずにすむのか、それがわからないうちは、子どもたちは警戒して決して心を許さないものです。2年間ではありましたが、高学年担任でその点については毎日いやというほど考えさせられました。ですから、してはいけないことの基準を決めて子どもたちに前もって伝えておくことにしました。そして、だれに対しても公平公正に接するように十分気をつけ

ました。

休み時間はできるだけ子どもと一緒に校庭で過ごしました。いつも遊ぶ子どもが同じにならないように、遊ばなかった子にも心を配りました。子どもだからといって体を思いっきり動かすのが好きな子ばかりではありません。好きだけれどうまくいかないので尻込みしてしまう子、もともと体を動かすことが好きではない子、いろいろです。日によって気分が変わることもあります。教師は子どもたちと一緒の時間を過ごすことで、その子の状況の一端を何とか把握できるのだと思います。子どもたちは、休み時間には授業とはまた違った顔を見せてくれます。自由に過ごす様子を見ながら、次の時間の学習で活躍させたいという思いが生まれたり、適切なときに厳しく諭すことが必要だと判断したりします。一人ひとりの子どもの姿をよく見て、話をよく聞いて一人ひとりの成長にかかわりながら、喜びも悲しみも共有したいという思いで過ごしていました。それが教師としての大きな喜びでした。イエスさまが話された、100 匹の羊の群れから迷い出た 1 匹の羊を見捨てずに最後まで探し出す姿こそ私の目指す教師像だと改めて気づかされました。それが、神さまが私を探し出してくださったことに感謝して生きるクリスチャン教師の使命だと確信するようになりました。

学習の計画については原則として、本校と 2 分校の学年で大きな違いのないように揃えるようにしていました。しかし、実際には各学期末の段階で教科書のこの単元まで、といった終わりを共に定めながら、あとは教員各個人の裁量に任されていました。教員経験も 3 年目となり、授業展開の基本的な技術は分かってきたつもりでしたが、年間の指導計画を立てる際、やはり初めは苦労しました。行事などの様子がわからなかったからです。学校行事やその取り組み方などは学校によって異なるものです。年間行事予定表は最初の職員会議で配布されていますが、その字面だけでは詳しいことはわかりません。行事本番までにどのような準備が必要なのか、どのくらいの時間を費やすのか、教員同士の打合せや本校での会議などは何回ぐらいあるのか、といったことは 1 年間をその学校で過ごし、体験してみ

ないとわからないことです。ですから1年目はできるだけ目や耳を大きく開き、素直な心でその学校が選択してきたやり方を受け入れ、学ぶ心構えが大切だと考えました。私の教員経験はまだ浅いので、前の学校のやり方と比べることはしないように努めました。

子どもたちとの分校での学校生活が動き出しました。全体で50名ほどの子どもですので、名前を覚えるのに苦労はありませんでした。また、20代の男性教員ということで、学年を超えてよく一緒に遊びました。学習の指導に関しては、とにかく子どもの興味を引くことをあれやこれや試しながら進めていきました。教師の裁量に任されたということの有り難さを痛切に感じながらの毎日でした。子どもたちが夢中になって分かりたいと、前のめりになる授業を心がけました。全ての子どもの思いを引き出し、仲間とかかわり、わかっていく学びを目指していました。そのために必要なことは、教師の自由な発想と試みと指導後の丁寧な振り返りだと考えていました。私がそう考えるようになった要因は、やはりキリスト教信仰と卒論で取り上げた生活綴り方を通した教育、中でも兵庫県の東井義雄先生の実践でした。

3. 生活綴り方とへき地教育

(1) 生活綴り方教育との出合い

私が中学生時代に聖書と出合ってから、大学生までの間に旧約新約聖書全巻を通読しました。その中で人は旧約聖書で教えられ、新約聖書で神さまに救い出されて生きるといった印象を持ちました。それは人間の努力が実って、ということとはまったく違うことだという感覚を抱きました。この感覚は、学びによって人が向上することと似たところがあると直感的に思いました。小学校から高校までの学校生活の中でいつも重視されてきたことは競争でした。将来学校の教師にだけはなりたくないと思っていた私がドイツ文学科から教育学科に転科して教師になったのは、聖書の教えと教育を結び合わせてくれた立教大学のおかげだと思っています。

とりわけ卒論作成の資料として浜田陽太郎先生が紹介してくださった生活綴り方教育、特に兵庫県のへき地で地道な教育実践を行い、記録をまとめた東井義雄先生の著作に出合ったことは貴重な経験でした。第二次世界大戦後の貧しさの中で、一山村で教師として子どもを育てることの意義は何かと、誠実に真摯に問いながら村に生きた教師の記録をじっくりと読みこんだことは、私にとって価値ある学びであるとともに大きな財産となりました。村に腰を据え、日記や作文を通して子どもたちに深く生活を見つめさせ、感じ、考えることの大切さを教え、子どもたちの表現に価値を見出しそのすべてを受けとめ、母親の愛を手本に主体的に生きる学力をつけようとの思いを抱き実践を積み重ねた教師がいたことを知り、深く感動しました。東井先生がいつまでも自分は「ほんもの」からははるかに遠いと省察される姿に、私もその後を引き継ぎたいという思いを強く抱くようになりました。クリスチャン教師としてどう歩んでいったらいいのかという問いに対して示唆を与えていただいた出合いでした。

(2) 生活綴り方教育をいかして

卒論で出合った生活綴り方教育で学んだことを、担任として実践していきたいという思いは教師１年目から持っていました。しかし、初任の学校では思うような取り組みはできませんでした。教師としての基本を学び、先輩教師のまねをしながら何とか日々の教科指導、生活指導を落ち度なく進めていくことで精一杯だったからです。

分校においてようやく、生活綴り方教育から私が学んだ事柄を学習や生活の中で実践することができました。まずは生活日記を中心に取り組みました。子どもたちには、最初は何を書いてもいい、とだけ伝えて書くことの抵抗感を取り去るようにしました。東井義雄先生から学んだ「子どもの心と出会い、いのちと出会う教育を行いたい。」という思いは私の強い思いにもなりました。どのような場所でも、子どもたちが自分たちの生活をしっかりと見て、聞いて、考えたことを書き、仲間と共有しながら、共に

今いる場所をよくしていこうと考える指導をしていきたいと考えました。そこで、子どもたちが「〇〇ちゃんと遊びました。楽しかったです。」という内容だけでなく、もっとよく見て、もっとよく聞いて、もっと考えて書いていこう、と常に励まし続けていました。

やがて、観察したこと、考えたこと、気がついたこと、ぜひみんなに教えたいこと、などが書かれるようになってきました。それにともなって学習でわからなかったことなども書いてくる子があらわれてきました。学習日記の登場です。「わからなかったことを正直に書いてくれることで私も気づかされました。授業を進めることより、立ち止まってもう一度丁寧にみんなで考える時間を作れます。ありがとう。」と子どもたちに話しました。そのうちに、授業中にも「わからない」という声が聞こえてくるようになりました。初めは私がより丁寧に、と説明をし直していたのですが、少しずつ仲間同士で話し合ったり、教え合ったりするようになりました。日記を通して生活を考え、仲間づくりを考え、学習を考える「13 人の子どもたちと教師の私」14 人の学ぶ仲間の誕生です。

日記指導は 1 枚文集の形で 13 人とその家族の共有にしました。一日おき週 3 回ほどの発行でした。私が子どもの日記や、作文を書き写して原稿を作ります。現在であれば拡大縮小の容易なコピー機でさっとできてしまうのでしょうが、当時そのようなものはありません。B4 サイズのファックス用原稿用紙に書き写していきます。書き写すことによって子どもの思いや考え、書き方や息遣いなどが感じられるようになってきました。下から 6, 7 センチメートルの所に横線を 1 本入れて、下に私のコメントを加えました。コメントは内容、視点のよさ、書きぶりのよさ、見習うポイントなどを短い言葉で書き添えました。子どもたちは自分の書いたものが印刷されて読んでもらえることをとても喜びました。「私の書いたものはいつ載るの。」とせっつかれることもありました。1 枚のプリントに載せるのは原則一人ということで、どの子もその回の主人公となるようにしました。13 人全員の日記などを載せるのにはほぼ 1 ヶ月を要しました。中に

は日記などを書くのが苦手な子どももいます。最初のうちは2文か3文で終わってしまいます。その場合は短い日記をいくつかあわせて掲載しました。そのうちにすべての子どもたちがだれかに話しかけるように、ノートいっぱいに書くようになってきました。開始からしばらくして「家庭で読むことを楽しみにしています。」といった保護者の声が聞こえてくるようになりました。子どもたちの素直な心や、遊びの様子、学びの様子には心をいやす力があります。自分の子どもを慈しむように、共に同じクラスで学ぶ子どもたちのことにも関心が生まれ、分校で学ぶ家庭同士、共に生きる絆がさらに強まっていくようになりました。

(3)「わからない」のつぶやき

子どもが興味を持って学習に取り組むように授業を組み立てることは、言葉で言うほど容易なことではありません。私が特に気をつけたのは、導入の部分、授業の最初に何をするか、ということでした。日直の号令に続き、前回の授業を思い出させ、授業のねらいを板書するという定型化された時間が子どもたちの学習意欲をそぐことになっているのではないかと考えました。そこで、算数の問題に子どもたちの名前を使ったり、外へ出て分校の周りを見たり調べたりする学習を多くするように心がけました。ある時は黒板の前で転んでみて、起き上がって一言「今、目の前で見たことを作文に書いてごらん。」と作文の授業を始めるということを試みました。「先生が転びました。けがをしてないか心配です。」などと書いてくる子もいて良心がとがめました。同じものを見ても、感じ方、言葉での表し方は一人ひとりまったく違うのだということを出発点として、みんなで一緒に学ぶ学習へとつなげていきたいと考え続けていました。

しばらくすると、今日はどんな学習なのか目を輝かす子どもたちの様子が見受けられるようになりました。ところが、授業の初めはおもしろそうだからやってみようと思うけれど、途中で「よくわからない」といったつぶやきが聞こえてくるようにもなりました。「わからない」という声を発

することができる学級は、教師である私も共に学ぶ仲間に入れてもらえたということのあらわれのように感じました。また、それは子どものわかりたいという気持ちのあらわれでもあります。これがもし、教師の方が、ちゃんと教えた、わからないのはよく聞いていなかった子どものせいだ、といった姿勢を感じさせたとしたらどうでしょう。子どもなりにプライドがあります。困っていることを教師に語ろうとは思わないでしょう。わかっているふりをするでしょう。教師はだれでも子どもたちがわかるようになること、できるようになることを目標に授業の準備をしますが、学習者としての子どもはそう単純に教師の思い通りにはなりません。子どもは子どもなりのわかり方があること、わかり方は子ども一人ひとり違うことを教えてくれたのは、子どもたちの「わからない」という声でした。

(4) 算数指導への関心

子どもたちの算数の学習で聞かれる「わからない」とのつぶやきは、子どもたち同士では解決できないことがあります。何とかみんなでわかり合いたいと考えても、思ったようにうまくいくとは限りません。もしかしたら私自身に苦手意識があるせいかもしれないと思うようになりました。そこで、進んで研究授業を引き受けたり、他校の研究会に参加したりしました。分校2年目からはそれまで校内で所属していた社会科部から算数部に移り、それ以来、現在まで算数科の授業研究を続けることになりました。それもこれも「わからない」という言葉を声に出してくれた子どもたちのおかげです。算数の問題をできるだけ子どもたちの生活と関連づけること、常に数を量として目に見える形にして操作しながら学ぶこと、共に考え合うこと、を大切にしました。このことにより、算数の授業になると憂鬱そうにしていた子どもがだんだんと少なくなっていきました。私はこの子どもたちを次の年4年生になったときも担任をすることになりました。2年目になると「わからないからの出発」という教室の雰囲気はどの教科でもあたり前になっていました。導入の工夫で子どもたちの学習への本気度を

上げ、毎日少しずつ高くなっていく学習のハードルをみんなで越えていく学習の準備が楽しくなってきました。「わからない」というつぶやきが教育の営みの中心にあったことにこの子どもたちから気づかせてもらいました。それはまた、生活綴り方教育に専心した多くの先輩教師たちに出会わせてくださった浜田陽太郎先生のおかげと感謝しています。以後、私が校長として任された学校では「子どものわからないというつぶやきを大切にしましょう。」「わからないと言い合える教師同士のつながりを大切にしましょう。」と先生方に話し続けています。

4. 分校の生活

(1) 水泳指導

子どもたちと本校へ移動して学ぶ機会があります。夏の水泳指導、秋の運動会は会場が本校のプール、校庭で行われました。子どもたちの移動は路線バスで行います。特に一日がかりの夏の水泳指導の日は特別な日でした。

登校後、県道を走るバスの時刻まで準備をします。当時バスは2時間に1本程度走っていました。9時台のバスに乗るのですが、乗り遅れたら次は11時台なのでその日の水泳は中止になります。分校から県道のバス停までは徒歩で行くしかありません。1キロメートルほどの距離ですが、1年生を連れてのこの移動は容易なものではありません。分校児童約50名と担任4名の大移動です。1年生のことを考え、バス停に10分前に到着するために分校を先頭が出発する時刻は、バスの到着時刻より50分ほど前になります。1時間目の授業をする時間はありません。トイレに全員間違いなく行かせ、忘れ物がある子は家の方に届けていただき、てんやわんやといった状況です。

ようやく準備が整い、時計を見ると出発の時刻です。1年担任を先頭にバス停まで歩き始めます。周りは右も左も全て田んぼです。水泳が始まる時期になると稲もしっかり成長し、風が吹く度に一斉に同じ方向に葉がなびく景色は大変美しいものでした。歩きながらよく歌を歌いました。1年

生が飽きてしまわないように大声で歌います。一番人気は「森のくまさん」でした。青空のもと分校全員の大合唱です。

バスに乗れば7、8分で本校に到着します。T分校の水泳の時間は3、4時間目、本校の理科室が控え室になりそこで着替えます。25メートルの通常の学校サイズのプールに50人だけで入ることはちょっとした贅沢です。ここでの全体指導は楽しい体育指導にかけては千葉市でのリーダーとなっている分校主任のF先生で、1年生から4年生までの子どもたちが一緒に楽しめる工夫が随所に組み込まれています。4年生が最上級生として下級生を楽しませるといった場面も多くあり、4年生の子どもたちも鼻高々です。本校の子どもたちもうらやましそうに眺めていました。楽しい時間もあっという間に過ぎ、終了の笛を吹くと、子どもたちはいつももっと泳いでいたいのにという顔をしていました。控え室に戻り、その日は全員で給食をいただきます。ここでも4年生はてきぱき1年生の面倒をよく見ます。女の子の髪を拭いてあげたり、給食の配膳を率先して行ったりします。給食終了後、帰りのバスの時間までは休憩です。午後1時台のバスに乗って分校まで帰ります。これからがいよいよ、その日の中で教師が一番注意しなければいけない時間になります。心地よく揺れるバスの中でうとうとしている子どもを起こし、バスから降りて3、40分歩いて分校まで戻るその時です。思いっきり泳いだ後おいしい給食を食べ、温かな日差しを浴びながら歩いて帰るのです。眠い目をこすりながら足下はふらふら、1年生の子どもの中には、本当に歩きながら眠ってしまう子がいるのです。道の端は両側とも少し低くなった所にある田んぼです。川にかけられた橋を二つ渡ります。車の行き来も無いわけではありません。1年生を眠らせないことが鉄則です。4年生もそれは十分わかっているので、1年生と手をつなぎ、行きよりも大きな声で歌いながら帰ります。時には眠ってしまった1年生を教師や4年生がおんぶすることもありました。午後3時近くになってようやく分校に到着します。みんなで挨拶をかわした後、さらに4、50分の道のりを歩いて家に帰る子も少なくはありません。下校後の1時間は

疲れて帰る子どもたちが途中で事故にあいはしないかと職員室の電話の前で待機しています。分校の水泳指導の一日はこうして過ぎていきました。

(2) 自転車通学練習

二つの分校とも、5年生になると本校まで自転車通学をすることになります。T分校から本校までの距離は約4キロメートルです。子どもの家からだと7，8キロメートルになる子もいます。また、車の通る県道をどうしても通らなければならないので安全指導は欠かせないものでした。T分校では4年生になると学期に1回ずつ自転車通学練習の時間を設けていました。その日は分校まで自分の自転車に乗ってきます。最上級生だけの特権ですので、子どもたちはどこか誇らしく思っているように見えました。

教室で諸注意を確認してからいよいよ出発です。私はオートバイで子どもたちの先導を務めたり、最後尾にまわったりしながら本校まで出かけます。ヘルメットをかぶり左側通行で、といった基本から、見通しの悪い交差点、車のスピードが出そうな直線道路などポイントで止まりながら教室で話したことを確認します。30分ほどで本校に到着すると、どの子も緊張から解放され、力が抜けたような顔をしていました。校長先生はいつも「よく来ましたね。おつかれさま。」と笑顔で迎えてくださいました。そして、一休みしてから分校に帰ります。

通常の学校では4年生は、5、6年生のように学校行事の中心になることはありません。それに比べて分校の4年生の役割は、ほぼ6年生と同じです。とは言え、まだまだ10才の子どもです。5年生になったら雨の日も風の日も毎日この道を一人で通学しなければなりません。小さな体でけんめいに自転車をこぐ後ろ姿を見守りながら、本校に行ってからも気後れすることなく様々な場面で活躍してほしいと祈らずにはいられませんでした。

(3) へき地教育研究会

1年間に数回でしたが千葉県のへき地教育研究会が開かれ、分校からは

私が代表で参加しました。千葉県には、内陸部や南端の安房地方などにへき地小規模校が多く存在しています。それらの学校の研究を公開しながら普段交流が乏しくなりやすいへき地校に勤務する教員の資質向上を目指す研究会でした。

養老渓谷に近いある山の学校では国語を中心として研究を進めていました。そのきめ細かな指導計画と独自に作成されたテキストなど先生方の努力には圧倒されました。授業も、子ども一人ひとりの学習を大事にするとはこういうことなのかと深い感銘を受けました。この山の中の小さな学校で高名な指導者の指導を受けたわけでもなく、先生方一人ひとりの知識と経験を生かしながら、協同することによってここまで到達した事実に感服しました。国語という教科を通して、子どもたちの心を潤し、視野を広げ、仲間とつながり、素直に自らの思いを表現する学びの姿は、へき地教育から日本の教育へ発信された大事なメッセージのように思えました。綴り方教育を進めようと考えていた私にとって、多くのことに気づかされた研究会でした。

君津市にあるへき地校での研究会では、学習参観だけでなく、子どもたちの生活を豊かにするための特別活動の様子を見せていただきました。特に、ブラスバンドの素晴らしい演奏は小学生でもここまでできるのかと驚かされました。学校生活の中で特別活動は時間数こそわずかなものの、分校の子どもたちの成長にとって大変重要な時間であると思っていた矢先のことでした。この学校の学年をこえた子どもたちによるクラブ活動の様子を見て、私はある企画を思いつき帰校後の研修報告で提案しようと心を躍らせながら学校を後にしました。

(4) 分校での全校合奏活動

へき地教育研究会の報告後、T 分校の特別活動に新たな活動が加わりました。1 年生から 4 年生まで全員で取り組む合奏の時間です。4 年生はクラブ活動で、3 年生以下は音楽の時間を使い、全員集まって合奏する時間

を特設しました。1年生から4年生まででは楽器の演奏能力も、楽譜を読む力もまったく違います。けれども、子ども一人ひとりに合った楽器を用いて全員で音楽を作り上げる楽しさを味わってほしいという思いで始めました。合奏を通して一人ひとりを大事にし合い、心と心のつながりをさらに強めることになるようにと考えました。合奏によって培われた人を信じる心と、いのちといのちとのふれあいは、いつしか社会に貢献できる人となるための糧となることを信じ、祈りながら取り入れた活動でした。

課題を解決するための準備を始めました。主に旋律楽器として鍵盤ハーモニカとリコーダーの技能を高めるための練習帳を自作することにしました。まずは基礎から段階的に高めていき、短い曲を一人で吹けるようになることを目指しました。子どもは目標が決まり一つ一つ段階的に向上する練習が大好きです。練習帳をわたされると多くの子どもが譜面を見ながら、友達や高学年の4年生に教わりながら練習を始めました。練習帳の制作は私の担当です。簡単な指の動かし方から、タンギングの仕方など、音楽の教科書や練習用教材などを参考に、鍵盤ハーモニカとリコーダー練習のための曲集を作りました。

折しも、次の年のへき地教育研究会を勤務するS小学校で行われることが決定されました。T分校での公開は、分校独自の全員合奏への取り組み紹介と演奏を行うことになりました。子どもたちの住むこの地域を大切に、仲間を大切に、という目標を持って始めた分校合奏です。私たちの指導改善につなげられるとともに、やはり、聞いていただけるということは子どもたちにとって大きな励みとなります。企画、準備は主として私に任せられました。いつか子どもたちがこの曲を演奏したのだと大人になっても誇りに思える曲をと考え、スメタナ作曲「我が祖国」から「モルダウの流れ」を選びました。T分校で学ぶ子どもたちが生まれ育った故郷をいつまでも忘れず、愛し続けてほしいと願っていたからです。愛する祖国のために作られたこの曲は、川の大きさこそ違うものの分校の前を流れる川とぴったり合っているように思いました。

曲が決まり小学生の合奏のために編曲した楽譜探しから始めました。しかし、なかなかこれといったものはありません。そもそも、1年生から4年生までの合奏を想定した楽譜などありません。無いなら作るという分校教師のやる気に火がつきました。実際に作成するまでは大変なことでした。次第に、曲を美しく響かせることよりも、1年生の○○君、4年生の○○さんをこの曲でどう生かすかと考えるようになってきました。原曲のメロディーはそのままに、楽器は分校にある物をどう使うかを考え、一人ひとりの顔を思い浮かべながら編曲作業を進めました。少しずつ出来上がるたびに先生方に聞いてもらい、率直な感想や助言をいただきました。休日も分校の楽器に囲まれ作業を続けました。校庭に遊びに来た子どもに頼んで楽器を弾いてもらい、どうかな、何とか弾けそうかな、などと相談しながら進めました。先生方とたくさんの子どもたちの協力のおかげで総譜が完成したのは夏休みも終盤になった頃でした。

二学期に入ると、練習に拍車がかかりました。研究会当日、緊張した面持ちで食い入るように指揮者の私を見つめる子どもたちのひたむきな演奏に胸が熱くなりました。参加された先生方の中には目を潤ませて聴いてくださった方もいらっしゃいました。子どもたちの持つ力はすごいと驚嘆させられた一日でした。

5. 学級文化と特殊教育

(1) 芸術教科を学級の中心に

分校では音楽、図工の指導も担任が行います。子どもたち一人ひとりのいのちが生み出すような教科の学習はとても楽しいものでした。分校の周りやそれぞれの家の周りは田んぼや畑が多く、一見変化に富んでいるとは言えないかもしれません。しかし、道端の花や、林を飛び交う鳥や蝶などよく見れば豊かな色彩にあふれています。生のコンサートに触れる機会はほとんどありませんが、多くの田んぼを潤している川の音や、鳥の声、近くの牛舎から聞こえる牛の声、竹林の葉の擦れ合う音など、気づけば都会

にはない自然の音が人の心を和ませてくれます。

私は日頃からよく見て、よく聞いて、よく触って感覚を鋭くすることで自分たちの住む場所の美しさに気づく力を養えるよう、生活日記を中心に指導していました。生活をよくする、学習を向上させる、仲間意識を深めることと全く同じです。図工では、仲間を描くことを大事にしました。「髪の毛の色は何色ですか。」と尋ねると子どもは「黒です。」と答えます。「本当にそうですか。お隣の人の髪をよく見てごらん。」と言うと「あ、緑かなあ。」とか「こげ茶かな。」というつぶやきが聞こえるようになりました。じっくり見ることの大切さを繰り返し伝えながら、写生にもよく出かけました。同じ場所でも、季節によって植物は色や形を変えてくれます。動物たちは成長していきます。ここでも、よく見て、よく気づいてといった学びを大事にしました。

音楽では、3年生から学習が始まるリコーダーを中心として、学級づくり、仲間づくりを行うことにしました。リコーダーは小さいものから大きいものまで種類は多くても、運指方法は二つしかありません。音の美しさ、和音の美しさ、心地よさ、を味わうのに最適と考えました。教室にはソプラニーノ、ソプラノ、アルト、テナーそしてベースの5種類のリコーダーを揃えました。4年生になる前からアルトリコーダーに挑戦していました。合奏曲にはドローン効果を取り入れて、運指やタンギングの苦手な子も和音の低音部だけを長く演奏することで合奏に加われるようにしました。低音部の2、3の音だけの運指であれば誰でもできます。合奏にも深みや広がりが生まれメロディーがより美しく響きます。帰りの会の時間にみんなで合奏したり、雨の日の休み時間、放課後など、数人で集まって合奏を楽しんだりしていました。

学校生活で子どもたちの成長、向上を求めるためには、民主的な学級風土と文化がとても大事だと考えるようになっていました。互いにモデルとなって友達の絵を完成させたり、練習を重ねながら合奏したりする中で、一人ひとり違っている、自分と同じ子どもはいない、だからこそ、クラス

ではどの子も大事なメンバーだということに気づいていくのです。また、音楽や詩の暗唱などの文化的営みは心を穏やかにしていきます。やがて、自然と互いに学び合う姿が見られるようになってきました。生活日記に友達のよいところに気づいて書く子も増え、1枚文集に掲載してみんなで読み合いました。「学校は競争する場所ではなく、一人ひとりの違いで彩り豊かに協奏する場所です。」と私が常に語り続けている言葉は、この分校の指導経験から生まれたものです。私は学校の土台は「神さまは一人ひとりの子どもを愛されている。」という聖書の言葉にあると思っています。

(2) 特殊教育の学び

へき地指定の学校の近くには他の教育施設がないため、理解力が際立って低い子や様々な問題を抱えた子も一緒に学ぶことになります。私自身はそのこともへき地教育の魅力だと思っていました。T分校で始めて担任した13名の子どもの中に、担任には一言も自分から話をしない女の子がいました。初めは恥ずかしがり屋なのかと思ったのですが、どうもそうでもありません。主任の先生に話を聞くと入学してからずっとそうだとのことでした。ただ、休み時間などは物静かではありますが、気の合う友達と楽しげに遊んでいましたし、話もしています。国語の音読のときは小声ですが自分の番になるとしっかりと読みます。毎日生活日記もきちんと書き、学習したことの定着度も高くきわめて優秀な子でした。保護者も家庭では普通に会話をしていることもあり、あまり心配をしていないようでした。けれども、私は友達や家族のような心のふれあいがしたい、小さい声でもいいから私に話しかけてほしいと思いました。教師として何かできることはないだろうかとずっと思い続けていました。私が学生の頃、教会で友達とよく歌っていたゴスペルフォークに「どんな遠くの呼び声でも、愛の耳は聞き分ける」という歌詞があります。生まれも育ちも違うのですから、大きな声で話せる子もいれば、小さな声、声にならないような声で何かを話しかけている子もいるはずです。それに加えて、理解力や体力も一人ひ

とり違います。子どもたち一人ひとりの賜物をいかすために「愛の耳を持った教師になりたい。」と考えるようになりました。そのためには、様々な子どもたちのことについてもっと学ばなければいけないと思い、当時学校の夏休みの間に開催されていた特殊教育免許認定講習に参加することにしました。当時この講習は実際に特殊教育に従事しながら免許を持たない多くの教員のために開催されていたのですが、千葉県では門戸を広く開き、一般教員の受講も認めていました。学生時代とは違い、講義内容と学校現場での実体験とを比較しながら学ぶことができました。その内容は分校での指導にも大いに役立ちました。自分からは私に話をしない女の子は分校に在籍中大きな変化はありませんでしたが、微笑みは確実に増えていきました。そして、この特殊教育に関する講習会受講の経験が、次に私が遣わされた場所で生かされるとは、その時まったく思ってもいませんでした。

（立教小学校校長・JICE 所員）